



パワーストーン



高橋桐矢・作
てづかまよ・絵

——ファミレスでいっしょにご飯を食べてくれたら、五千円お小遣いあげます。

早由希は、そのメールに目をとめた。ご飯を食べるだけでいいなら。ファミレスなら、制服のままでも入れるし。キモいおっさんじゃないといいんだけど……と思いがながら、メールに返信する。

——中学二年生です。これから会えますか。

送信したところで、電車のドアが開いた。人の流れのあとについて、ホームにおりる。早由希が通う塾は駅から少し歩いた先にある。いつも塾の前の昼食はマックだけど、うまくいけば今日はファミレス。お小遣いつきで。

改札を出たら、手に持った携帯がぶるつとふるえた。

「返信、はや！」

貧しい少女にお小遣いをくたさる『神様』は、あと三十分待って欲しいとご所望。もちろんOKとすぐに返信する。

早由希は何もわからない子どもじゃない。初対面の中学生に五千円お小遣いをくれる神様……もとい、キモいおっさんが、本当は何をしたがっているのか知ってる。女子中学生は、高校生より相場が高いつても、知ってる。そこまでする気はないけど、同じクラスの女子が神様とホテルにいつて、何万円もお小遣いもらった話も聞いている。

早由希が神様募集サイトに投稿したのは今日が初めてだ。理由はもちろん、お金が欲しいから。今日は制服だからいいけど、中学生になってから私服をほとんど買ってない。リップやネイルだって買いたい。だんだん自分がくすんで、みずばらしくなっていく気がする。お父さんがいたときは、